

# 発展源文学

**-Advance of GENBUN-**



**BloodyWorks Presents**

## 2 前書き

### 前書き

今回は何のかんので小林源文初級ファン向け参考書シリーズ第三弾として本誌をお届けします。今回の主題は源文作品の中でも幻と黒歴史の境界に近い地位にある佐藤大輔との合作『東京兵団』。ミリタリー系雑誌と比較すると相当に「一般的」な地位にあるといえる某アニメ雑誌に掲載され、単行本になる暇もなく打ち切りにされてしまったという『源文版ゴジラ』や『源文版マジンガーZ』を超える知名度の低さを誇る未完の長編作品です。

この『東京兵団』は前作「基礎源文学」執筆のための資料探しの最中にその存在が判明したものの、その時点では原本入手の目処どころか詳細な内容すら明らかでなかったため全く扱うことができませんでした。しかしその後の索敵により連載開始から休止までの発表全話を入手することに成功したため、ここでめでたく主題として扱うことが可能になりました。なお入手難度やこれまでの経緯から考えて同作品が今後普及する確立は皆無に近く、多くの方にとって「盛り上がり所をばかした紹介記事」よりも「同作品の詳細な情報」を掲載したほうが望ましいと判断したのでストーリー紹介や考察などかなりのネタバレを含む形で記述されています。ご注意ください。

平成 18 年 8 月

BloodyWorks 『基礎源文学』製作委員会

本文及び構成担当 野分はるな

## 作品詳細紹介：『東京兵団』

### 1.序

『東京兵団』は今から 20 年近く昔に、作・構成 / 藤大輔、作画 / 小林源文で月間『アニメージュ』に連載されていた知名度の低さ最大レベルの源文作品です。雑誌連載といえばミリタリー関連ばかりである小林氏が大衆的ヲタク分野のメインストリームといってよいアニメ雑誌に連載をしていたというのは驚きの限りですが、やはりどんな媒体に載っても「いつもの画風」を崩すことのない氏の劇画<sup>1</sup>は当時のアニメファンには受け入れられ難かったらしく、連載 10 話にして突然主人公が戦死して終了とまるで週間少年ジャンプの打ち切り漫画ような結末になってしまっています。

そもそも『東京兵団』が連載されていた 1989 年ごろの『アニメージュ』は読者投稿欄にアンパンマンや手塚治虫<sup>2</sup>作品のイラストが投函され、キャラクター人気投票の上位に初期ジブリ映画のヒロインたちが大量にノミネートされているなど現在のどぎつい雑誌内容からは想像し難いほどに純朴な月刊誌<sup>3</sup>でした。当然その読者層からは軍事臭の強すぎる源文作品の評判は思わしくなく、連載することに対し

---

<sup>1</sup> セガサターンから発売されたガンダムゲーム「コロニーの落ちた地で」のキャラ絵を担当したときもセル画調でなく劇画だったため多くのガンダムファンからは不評をもらったらしい。なおこのゲームはストーリー方面にも氏が関わっていたためガンダム作品とは思えないほど物語の展開が渋い(ガンダム作品の癖に「主人公がガンダムに乗って大暴れ」しないとか)。さらにノベライズ版の作者は架空戦記作家でもある林譲治氏。

<sup>2</sup> このあまりにも有名な漫画家が世を去ったのもこの時期。

<sup>3</sup> 当然「萌え」という単語自体がまだ全く一般的ではない。

#### 4 作品詳細紹介：『東京兵団』

てかなりの批判が出ていたという記述も小林氏の 2ch の書き込み<sup>4</sup>に見受けられます。おそらくアニメ雑誌に硬派な劇画を連載するというチャレンジに失敗した（最低でも 15 年は時代が早かった）ということが、この作品が闇に葬り去られてしまったことの最大の原因といえるでしょう。

その後この『東京兵団』は他のミリタリー雑誌で再掲載されたという話（未確認）を聞くものの、本格的に連載が再開されるという動きはついになく今なおその存在を影に葬り去られたままとなっています。単行本が存在せず、さらに連載雑誌自体も発行から長い年月が経ちすぎているため入手性は最悪の部類に入り、Amazon.com や Bookoff といった通常の中古本流通ルートでは手に入れることはまずできません。筆者の場合は中古雑誌を専門に扱うオンライン書店を利用して購入した他にそれでも足りない分は知る限りの古本屋を実地で探し回ることでもかろうじて全巻を取り揃えることができました<sup>5</sup>が、おそらくインターネット上で見つからない場合は大都市圏の古本屋街（の怪しい店）を捜し歩くのが最も確実性の高い手段ではないかと思われます。

---

<sup>4</sup> 「（『東京兵団』は）編集部から過激なセリフはイカンとケチ付けられた作品で未完です。再開の予定はなしです」らしい（2000 年頃の 2ch 某スレッド過去ログより一部抜粋）。さらに執筆途中投げ出し常習犯の佐藤大輔とのタッグ作品であることも続きが作れない原因かもしれない。

<sup>5</sup> 悪夢の古本屋 25 件梯子。ブックオフを含めると 40 件近く。この強行軍は筆者をしばらくの間古本屋アレルギーにさせるに十分な内容であった。

## 2. 『東京兵団』とは

「ゲームが趣味のごくごく普通の 17 歳の少年がひょんなことから人型兵器を託され、それを操って日本を征服しようとする軍隊と戦う物語」こう紹介されたとき、果たしてあなたはこの『東京兵団』に対してどのようなイメージを抱くでしょうか。ガンダムのようなストーリーを思い浮かべる方も多いと思われます。

小林源文が描き、構成を佐藤大輔<sup>6</sup>が担当しているような劇画がそのような安っぽいロボットアニメのような話であるわけがないと思われる方もおられるかもしれませんが、驚くべきことに先ほどの紹介文はある意味では全くの真実といえます。もちろん表現にバイアスをかけ、詳細な説明を意図的に省いている訳ですが、物語の根本的な部分のみを抜き出して紹介文を作ったとすればこれを完全否定する要素は作中のどこにもありません<sup>7</sup>。

小林氏が「アニメージュ」というアニメファンを対象にした雑誌に進出するに至り、主人公を職業軍人ではなく平凡な少年にしたのがガンダムに代表される子供向け（大きなお友達向け？）アニメの習慣を配慮した結果であることは容易に想像することができます。それでも第一話から「平凡な少年が人型兵器を操れるようになる為に施される（海兵隊調の）過酷な新兵訓練」をしっかりと描いている時点で「少年が何の苦労もなく人型ロボットのパイロットになり大活躍する」アニメに対する小林氏と佐藤氏のアイロニーが発露されている訳ですが、この『東京兵団』が軍事的口マンとそれを表現する上で必要とされる

---

<sup>6</sup> 何故か第一話だけ「佐藤大輔」で、第二話からは「藤大輔」になる。理由は謎。

<sup>7</sup> とはいっても水の性質の一部だけを取り出して並び立てると、まるでそれが最悪の環境汚染物質であるかのような文章を作ることができるのも事実なのですが。

## 6 作品詳細紹介：『東京兵団』

リアリズムを重要視してきた彼等が打ち立てた一つの回答であり、壮大な実験であることは疑うべくもありません。

ここまで言い切ってしまうと小林氏が新たなジャンルに挑戦しているようにも見えますが、結局のところ無理やり解釈すればアニメ的な流れが見えてくる<sup>8</sup>というだけであり、小林氏や佐藤氏の本来の作風やスタンスは全く隠されていません<sup>9</sup>。そのため、「アニメのお約束」からかけ離れた表現やストーリー展開が余りに多いことも事実で、欄外の編集部のコメントなども見ても、やや見当違いなものが多く雑誌全体がこの作品を持て余し気味だった事がうかがえます。

そんな訳でこの『東京兵団』は連載開始から終了まで一貫して雑誌全体から浮き上がった存在となっています。『東京兵団』の雑誌内での定位置は（今のそれから想像される様なヲタ臭がそれほど強くない）ほのぼのとしたアニメイラストが並ぶ読者投稿コーナーや青春やサスペンスを扱っている別の連載漫画の付近となっているのですが、雑誌を手に取り表紙から読んでいくと『東京兵団』の8ページだけが汗と血と泥に満ちた全くの異次元空間と化していることがはっきりと感じられます。

この『東京兵団』は読者からの評判が芳しくなく連載打ち切りに追い込まれたことは前述しましたが、そうされても致し方ない、それよりもよく十ヶ月も続けられたものだと思えるほどにこのギャップは顕著です。主人公達が乗り込む主役メカはビームライフルや巨大な剣

---

<sup>8</sup> 筆者には作者か構成担当か編集のいずれかが「アニメージュ」の編集部を騙して企画を押し通すためにあえてこうした、としか思えません。

<sup>9</sup> 第一話の冒頭見開きに描かれているのが半壊した新宿新都心を背景に綴られる膨大な歴史年表設定である時点で、佐藤大輔ファンは構成担当が「本気」で仕事をするつもりであることが理解できます。

を持った人型ロボットではなく、ガトリング砲や無反動砲、ハンドアックスといった実在の武器で武装した無骨なパワードスーツ。その上描かれているのは操縦者は「脱出装置と冷房完備の安全なコックピットでロボットを動かして行う戦い（バトル）」ではなく、「気密スーツの中で汗と血にまみれながら行う戦争（ウォー）」の訳ですからこの時点で『東京兵団』はロボットアニメのお約束を完全に破ってしまっています。アニメファンの理解者が少なくなってしまうことは致し方ないといえるでしょう。

またその他の表現についても一般論的に見て過激<sup>10</sup>で、難民の流入でスラム化した東京（の非戦当地区）では「東西のゲーム的な戦争の結果を賭けの対象にしたヤクザ経営の賭博」が数少ない娯楽として市民の間で人気を博しているという様な過激でブラックな情景が多く描かれています。

更に象徴的なのが「戦争反対のプラカードを掲げて行進する反戦団体に発砲し戦車で踏みつけるソ連軍」を平気な顔で描いているということでしょう。それだけでもある種の人々にとって衝撃的であるにも関わらず、『周囲の反戦団体を気にせずソ連軍攻撃を命じる味方（西側）指揮官と、流石に撃つ気にはなれないが特に助けに行く気もない主人公』を当然のように描いてしまう時点で推して知るべきといえるでしょうか。もちろん源文ファンであれば『軍服を着ずに戦闘区域中で軍隊に集団で向かっていくような輩』はゲリラと見なされて当たり前であることが理解でき、それをわきまえずに虐殺される平和主義団体はある種のブラックな「お約束」であるので何の問題もないのですが・・・

---

<sup>10</sup> 青少年に対し好ましくない影響を云々といったお決まりの表現が最も当てはまる。

## 8 作品詳細紹介：『東京兵団』

このように掲載雑誌の方向性から完全にかげ離れた存在である『東京兵団』は作品自体の完成度とは無関係な事象（要するに「場をわきまえなかった」）ことが原因で雑誌構成上も片隅<sup>11</sup>へと追いやられ、読者からも見放され非常に中途半端な形で終了を迎えてしまいました。

『ゲイツ』と双璧をなす長編パワードスーツ作品であり、現代の東京という日常に近い舞台を題材とした魅力的な作品であるだけに非常に残念でなりません。

### 2.1. 『東京兵団』歴史概略

ソヴィエト連邦が崩壊せずに存続し、1999 年に東西で核戦争が勃発した世界での物語。

1990 年代前半、アメリカは東側 ICBM を無力化するべく、レーガン大統領の SDI 構想をモデルにした統合宇宙防衛システムの構築を開始した。これに対し技術的・資金的問題から同様のシステムを構築できないソ連はより低コストで ICBM 迎撃網を無効化する手段として「兵士による迎撃衛星の撃破」を行う特殊部隊（コスモトニキ）の編成に着手する。こうして東西二大国による軌道上の軍拡競争が始まった。

ここで西側諸国は衛星防衛のために最新テクノロジーを結集し、軌道上での戦闘力に優れた個人用戦闘兵器の開発を試みることになった。個人用機動戦術ユニット、いわゆるパワードスーツである。その戦闘能力はただの気密服を着用しただけのコスモトニキを軽く凌駕

---

<sup>11</sup> 連載が回を重ねるごとに巻頭でも巻末でもなく人気コーナーからも遠い中途半端な位置に、広告に挟まれて掲載されることが多くなっていく。



し、その活動を封じるのは確実と思われるほどであった。

一方こうした軌道上での軍備拡張競争とは無関係に、地上では東西両陣営の間で緊張が高まっていた。イランの内戦と共産政権の樹立を契機に高まった中東地域の緊張は次第にエスカレートし、ついにパキスタン・ソ連間での戦術核の応酬という事態にまで至ってしまう。更にこの代理戦争に米中央軍までもが参入、米ソ正規軍同士の正面衝突という事態すら発生した。ここに至り、かねてからの ICBM の無力化を懸念していたソ連指導部は先制全面核攻撃による戦争の早期決着を決断。ついに第三次世界大戦が勃発した。

ところが戦局はソ連指導部の予測したようには推移しなかった。ぎりぎりのタイミングで量産初期モデルの実戦配備を完了していたパワードスーツ部隊が期待されたとおりの性能を発揮し、コスモトニキの跳梁を阻止することに成功したのだ。この次世代兵器によってソ連の迎撃衛星網破壊作戦は完全に頓挫し、西側主要都市を目標した ICBM の大多数が起爆前に撃破されてしまったのだった。これに対し迎撃システムを持たない東側の主要都市には悲惨な運命が待っていた。これらの諸都市は開戦一時間以内に西側の報復を受け、核攻撃で軒並み焼き払われてしまったのだった。第三次世界大戦は西側諸国の勝利に終わるかと思われた。

しかし戦争はここで終わらなかった。核の直撃を免れたとはいえ電磁パルスでコンピュータが破壊され軍民を問わず混乱を極めていた西側諸国に対し、核による蒸発を運良く免れたソ連軍機の化学・生物兵器が降り注いだのだ。一般市民には毒ガスや殺人ウイルスに対する対策などできようがなかった。これにより西側主要諸国も人口の殆どを失い壊滅。大戦の死亡者はこの時点で推定十億人に達した。

工業力が壊滅したにもかかわらず戦争の継続を望む両陣営は、元の